

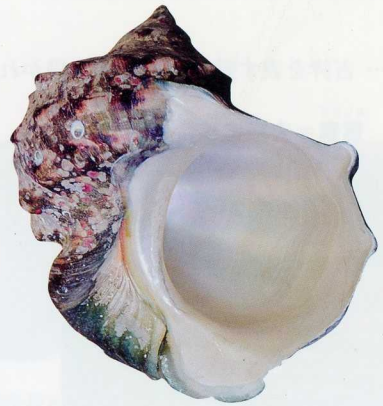
螺鈿と蒔絵

— 美しさをまとう —

会期: 令和2(2020)年6月19日(金)～8月16日(日)
会場: 佐賀県立名護屋城博物館 企画展示室

螺鈿とは

螺鈿とは、薄く加工した貝片を漆に埋め込む、もしくは木質に嵌め込むことで漆器を飾る技法や、それを用いた製品を表す言葉です。螺とは巻貝のことで、鈿は金属などを嵌め込んだ飾りを意味します。螺鈿は、もとは古代エジプトやメソポタミアの貝による装飾技法が発達したという説がありますが、その起源や伝播のルートなどは詳しく分かっていません。少なくとも唐代(618～907年)には中国でつくられており、日本へもたらされたものが正倉院宝物として現代に伝わっています。螺鈿は主として日本や朝鮮、中国や琉球など東アジアで発達していきますが、使用する貝や技法等は地域によって違いが見られます。日本においては、夜光貝やアワビ貝、蝶貝等を用います。



夜光貝

朝鮮螺鈿

朝鮮半島においても、螺鈿の技術は大きく発達しました。高麗時代(918～1392年)の螺鈿を「高麗螺鈿」、朝鮮時代(1392～1897年)の螺鈿を「朝鮮螺鈿」と呼びますが、現存する朝鮮半島の螺鈿のほとんどは朝鮮螺鈿で、高麗螺鈿は僅かです。高麗期と朝鮮期との違いは、文様の表現や技法に現れます。花文は小さく、茎は金属の縋線(すいせん)で表される特徴が高麗時代にありましたが、朝鮮時代になると花文は大きく、より写実的に、茎は細く細やかに加工した貝片を繋ぐようになります。また、朝鮮螺鈿では最も特徴的な「割貝」という技法も誕生します。割貝は貝を平たく割って、面的に漆器を飾る技法で、これは東アジアでは朝鮮に特有の技法です。今回の展覧会では数多くの朝鮮螺鈿を展示しており、これらは特権階級である両班層の女性が使用するために制作されたものがほとんどです。朝鮮時代に重んじられた儒教に基づき、男性は質素なものを好んでおり、女性が自身の部屋(内房)で用いるものに螺鈿等華やかな装飾がなされています。



螺鈿雲龍円文衣装函(割貝技法)



螺鈿十長生文文匣

高麗螺鈿から朝鮮螺鈿へ 過渡期を示す特徴

朝鮮時代前期に制作された螺鈿には、高麗時代の技法を強く残すものもあります。下の資料では、朝鮮時代を通して、どのように技法が変化していくのかを見ることができます。



螺鈿唐草文弘子



螺鈿牡丹唐草文膳



螺鈿牡丹唐草文盆

打抜法による爪型の細かな貝片を用いる。微細な貝片を緻密に並べた、高麗螺鈿の技法が用いられている。

花を表現する貝片は明らかに大きなものを用いるようになっている。しかし、茎部や天板の縁の装飾などには、金属線を用いており、高麗螺鈿での技法が残されている。

文様に用いる貝片は大きく、また茎(蔓)の表現に金属線ではなく貝片を繋いだもので表すようになっているなど、朝鮮螺鈿の技法を用いている。

吉祥の意味を持つ模様

吉祥文とは、おめでたい意味を持つ文様のことで、朝鮮螺鈿には吉祥文が描かれた品が数多くあります。花や動物をはじめ、一見風景画に見えるものでも、実は吉祥の意味合いを表したのもあり、多種多様な図柄が存在します。

文字文 … 寿や喜など吉祥の意味を持つ漢字を図案化したものです。

“寿”



螺鈿黒漆天桃雲鶴文盆

“喜”・“萬壽無疆”



螺鈿吉祥文字文虎足盤

喜を図案化した“喜”を中心に
周囲には「萬壽無疆」
(ばんじゅむきやう)
(限りない長命を祈る)の四字
を螺鈿で描いている。

動物文 … 吉祥を表す動物が象徴的に描かれています。その多くが対となっており、夫婦の和合を示していると考えられます。

おしどり

鴛鴦＝夫婦の和合



螺鈿蓮塘水禽文枕脇飾

蝶＝多産・長寿



螺鈿花樹蝶文裁縫箱

鹿＝長寿



螺鈿十長生文文匣

魚＝出世・家の繁栄



螺鈿十長生文文匣

亀＝長寿



螺鈿十長生文文匣

鶴＝長寿



螺鈿黒漆天桃雲鶴文盆

植物文 … 梅・蘭・菊・竹・牡丹・蓮・葡萄・柘榴ざくろなどが見られます。中でも梅・蘭・菊・竹は四君子と呼ばれ、朝鮮時代の儒学者に愛されました。

また、牡丹や蓮には富貴・康寧の願いが、葡萄・柘榴には多産・多福の意味が込められています。

梅＝勇気・忍耐



螺鈿花鳥文函

竹＝無欠・素直



螺鈿黒漆丸函

柘榴＝多産・多福



螺鈿花鳥文函

牡丹＝富貴・康寧



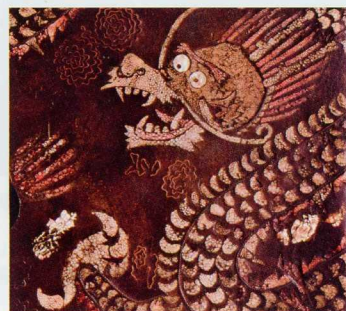
螺鈿吉祥文字文虎足盤

龍の模様がもつ意味

朝鮮螺鈿には、高貴さの象徴として龍の模様が用いられることがあります。特に龍の爪の本数は用いる人の位を表しており、中国皇帝(五爪龍)より冊封を受けた国の王は、爪が1本少ない四爪で表現されています。本展で紹介している龍文を持つ朝鮮螺鈿も、朝鮮王家に関係していることが想定されます。



螺鈿雲龍円文衣裳函

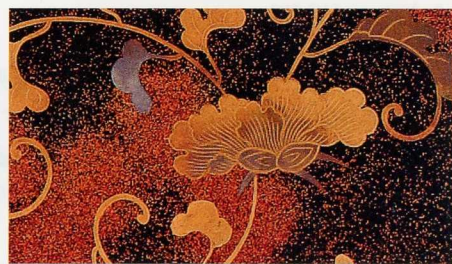


鯢皮双龍文函

蒔絵とは

蒔絵とは、漆地の上に金粉・銀粉等を「蒔き」文様を表現する装飾技法です。その起源は、奈良時代に唐より螺鈿などとともに伝わったとされる「末金鏤」であるとする説もあるものの、現在の蒔絵は日本で独自に発展を遂げた技法といえます。様々な手法が編み出され、豪華な文様で漆器を彩りました。

本展で展示する蒔絵は、桃山時代から江戸時代にかけて制作され県内に伝世した作品です。これらの品を使用したのは、豊臣秀吉や佐賀藩祖鍋島直茂の娘の千鶴、小城・鹿島両鍋島家の姫などで、一般の人々ではなかなか手に入らない、贅沢品でした。一口に蒔絵といっても様々な技法があり、多種多様な表現で文様を表しています。



な し じ 梨子地 … 大きめの金粉を蒔き、透漆(半透明の漆)で塗り込む技法。梨の肌のように見えるため名付けられたといわれる。種類として総梨子地(全体を覆うように蒔く)や叢梨子地(まだらに蒔く)などがある。

秀吉が使用したとされる蒔絵什器

豊臣秀吉が慶長2(1597)年に大坂の鍋島邸を訪れた際に入浴道具として設えられたとされ、小城鍋島家へと伝来した什器には、蒔絵で五七桐紋と菊紋が、桶や柄杓には平時蒔、角皿や椀には高蒔絵で施されています。



ひらまきえ 平時蒔 … 漆で文様を描き、金粉を蒔き付ける



たかまきえ 高蒔絵 … 炭粉・錆・漆等で文様を高く盛り上げた上に蒔絵をする

藩祖の娘 千鶴愛用の箏

佐賀藩祖鍋島直茂の娘の千鶴は筑紫箏の名手として有名で、弟の勝茂(初代佐賀藩主)の婚礼のために伏見へと赴いた際には、後陽成天皇に箏の演奏を求められました。しかし恐れ多さからすでに佐賀へ帰ったと上奏し、箏のみ天皇の前に出されたといわれています。この箏は、その秀麗さから天皇より「鳳凰」の名を賜った箏であると伝わっています。龍甲裏に“天正5年(1577年)霜月十八日”の墨書銘が記されており、箏本体の制作は桃山時代ですが、螺鈿や蒔絵等の装飾は江戸時代前期と想定されます。



立葵蒔絵螺鈿箏



蒔絵と螺鈿で立葵や蝶、亀などが華麗に装飾されているが、数多くの使用痕により中央部の文様の剥離が激しい。豪華な品を惜しみなく使用していることから、使用者の身分の高さが窺える。

大名家の姫たち縁の品

大名家の姫たちは、婚礼調度などで蒔絵の施された豪華な品々を持っていました。婚礼調度には、一般的に女性の実家の家紋が施され、揃いの意匠で統一されました。

本展の展示品の中には、鹿島鍋島家や蓮池鍋島家で用いられた、花杏葉紋が施されているものがあります。また、蒔絵香箱には全体に総梨子地が施されており、櫛台には叢梨子地が用いられています。



花杏葉紋



蒔絵香箱 梨地杏葉紋散



蒔絵八角貝桶 唐草杏葉紋



蒔絵箱 杏葉紋散・歌加留多



梨子地蔓牡丹文蒔絵櫛台

中国の螺鈿

今回展示する黒漆花鳥文螺鈿琵琶は、明代に中国南部で制作されたものとされています。この琵琶はその後、佐賀藩の豪商である武富家の廉齋という人物の手へと渡りました。時の天皇である後水尾天皇へ廉齋と琵琶の話が伝わり、天皇の求めにより御前で琵琶の演奏を行った際に、天皇より「孝鳥紋」の銘を賜ったといわれています。孝鳥とは、育てられた恩を親に返すというカラスの意味で、同じく孝行者として有名であった廉齋となぞらえて名付けたといわれています。中央部分のカラス(授帯鳥)の他に4対の鳥たちが繊細な表現で描かれています。



黒漆花鳥文螺鈿琵琶「孝鳥紋」

出品資料一覧

	資料名	所蔵	年代	備考
朝鮮半島の螺鈿				
1	螺鈿牡丹唐草文膳	名護屋城博物館	朝鮮時代(16~17C)	
2	螺鈿牡丹唐草文盆	名護屋城博物館	朝鮮時代(16~17C)	
3	螺鈿花唐草文扨子	名護屋城博物館	朝鮮時代(15~16C)	
4	螺鈿黒漆竹葉文鏡台	名護屋城博物館	朝鮮時代(19~20C初)	
5	螺鈿黒漆山水文函	名護屋城博物館	朝鮮時代(19末~20C初)	
吉祥の螺鈿家具				
6	螺鈿十長生文文匣	名護屋城博物館	朝鮮時代(19C)	
7	螺鈿蓮塘水禽文枕脇飾	名護屋城博物館	朝鮮時代(19C)	
8	螺鈿花樹鶏文枕脇飾	名護屋城博物館	朝鮮時代(19C)	
9	螺鈿花樹蝶文裁縫箱	名護屋城博物館	朝鮮時代(19~20C)	
10	螺鈿黒漆丸函	名護屋城博物館	朝鮮時代(19末~20C初)	
11	螺鈿黒漆天桃雲鶴文盆	名護屋城博物館	朝鮮時代(19末~20C初)	
12	螺鈿花鳥文函	名護屋城博物館	朝鮮時代(19C)	
13	螺鈿吉祥文字文虎足盤	名護屋城博物館	朝鮮時代(19C)	
14	朱塗螺鈿寿文函	名護屋城博物館	朝鮮時代(18~19C)	
15	螺鈿匠の作品 螺鈿櫛笄	名護屋城博物館	現代	
螺鈿で描かれた龍				
16	鮫皮双龍文函	名護屋城博物館	朝鮮時代	
17	鮫皮双龍文書棚	名護屋城博物館	朝鮮時代	
18	螺鈿雲龍門文衣裳函	名護屋城博物館	朝鮮時代(19C)	
19	黒漆螺鈿龍文矢筒(矢7本)	名護屋城博物館	朝鮮時代	
蒔絵-桃山・江戸時代的美-				
20	立葵蒔絵螺鈿箏	多久市郷土資料館	天正5年(1577年)霜月十八日制作 装飾は江戸前期か	佐賀県重要文化財
21	梨地高蒔絵椽 菊桐文	県立博物館	桃山時代	佐賀県重要文化財
22	梨地高蒔絵角盥 菊桐文	県立博物館	桃山時代	佐賀県重要文化財
23	蒔絵桶 菊桐文	県立博物館	桃山時代	佐賀県重要文化財
24	蒔絵柄桶 菊桐文	県立博物館	桃山時代	佐賀県重要文化財
25	蒔絵柄杓 菊桐文	県立博物館	桃山時代	佐賀県重要文化財
26	蒔絵柄杓 菊桐文	県立博物館	桃山時代	佐賀県重要文化財
27	梨子地秋草文蒔絵手箱	県立博物館	室町時代(16C)	
28	蒔絵八角貝桶 唐草杏葉紋	県立博物館	江戸時代(18~19C)	
29	蒔絵箱 杏葉紋散・歌加留多	県立博物館	江戸時代(18~19C)	
30	蒔絵香箱 梨地杏葉紋散	県立博物館	江戸時代(18~19C)	
31	梨子地蔓牡丹文蒔絵櫛台	県立博物館	江戸時代(18~19C)	
中国の螺鈿				
32	黒漆花鳥文螺鈿琵琶「孝鳥紋」	県立博物館	明代	佐賀県重要文化財

【付記】 (1)本展覧会の企画・立案は、学芸課飯田周恵が担当した。
(2)本パンフレットの執筆及び編集は津上幸那(デザイナー)の協力を得て、飯田が行った。
(3)本展覧会の開催にあたり、佐賀県立博物館、多久市郷土資料館に出品協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

テーマ展「螺鈿と蒔絵」 令和2年(2020年)6月18日発行	編集・発行 佐賀県立名護屋城博物館 佐賀県唐津市鎮西町名護屋1931番地3 TEL.0955-82-4905	印刷 株式会社 三光 佐賀県伊万里市大坪町乙 4161-1 TEL.0955-23-5808
-----------------------------------	--	--